死は「終り」ではない

山川千秋・ガンとの闘い一八〇日

山川千秋・穆子

山川千秋・穆子

は「終り」ではない

秋・ガンとの闘い一八〇日

文藝春秋

死は「終り」ではない

1989年3月15日　第1刷
1989年6月25日　第5刷

著　者　山川千秋（やまかわ ちあき）・穆子（きよこ）

発行者　豊田健次

発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3-23（〒102）
電話(03)265—1211

印刷所　凸版印刷株式会社

製本所　大口製本株式会社

定価はカバーに表示してあります

©Kiyoko Yamakawa 1989　Printed in Japan
ISBN4-16-343020-2

死は「終り」ではない＊目　次

I 衝撃のカルテ……9

◆3月31日

「食道の表層部に悪性の細胞が……」 11

恐れていたもの 11

見せられぬ涙 17

「一家心中したい」 21

天からの声 26

◆1月—3月

「健康診断はオールAだからね」 29

多忙な日々 29

声のカスレ 34

◆4月1日

「ついに、来るべきものが来たな」 40

ガンを告知する 40

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「声を失う」ことの衝撃　44
◆4月2日
「死は『終り』ではない」　49
ベックさんとの出会い　49
主人の二度目の涙　52

Ⅱ　死を見つめつつ——闘病日記……55

◆4月7日—4月13日
「人々は幸せそうだった」　57
病者の祈り　70
◆4月14日—4月17日
「私の中に大きな変化が起きている」　73
出会い、そして結婚　78
実之助君（手紙）　83

◆4月18日－4月23日
「名実ともに病人になった」 93
史門君へ（手紙） 106
◆4月24日－5月2日
「静かな、不幸の中の幸福」 111
再び実之助兄へ（手紙） 115
◆5月3日－5月29日
「治療はつらい、不快、苦痛だ」 122
森報道局長殿（手紙） 126
小山台高校四回生G組各位殿（手紙） 133
◆5月30日－6月24日
「一家が透明になったことに驚いている」 138
二人の息子たち 141
子供たちも苦しんでいた 145
再び実之助君へ（手紙） 153

大戸宏君（手紙）　154
十月復帰を目指して　162
仕事への情熱　162
さよなら「雀の学校」　166
Ⅲ　手術、そして五十五歳の瞑目……185
◆6月28日　8月31日
「食欲は皆無、最低の気持ち」　187
◆9月―10月9日
「無意味な延命だけはやめてくれ」　216
医療体制への疑問　216
最後の会話　222
『『クオリティ・オブ・デス』も大事だ」　225

三通の遺書――穆子へ、冬樹へ、史門へ　229

Ⅳ　三つの鎮魂歌（レクイエム）……237

「笑顔」――フジテレビ「社内報」より　239

めされた父――山川史門　244

天国のあなたへ――山川穆子　248

死は「終り」ではない

山川千秋・ガンとの闘い一八〇日

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

I　衝撃のカルテ

◆3月31日

「食道の表層部に悪性の細胞が……」

恐れていたもの

「じゃあ、行って来ますから、おねがいしますね」

泊まりがけで遊びにきている母に留守をたのんで、家を出た。

三月三十一日（昭和六十三年）のお昼ちかかった。通勤時間をとうに過ぎたこの時刻のあざみ野の住宅地の道は、ほとんど人影がなかった。行き先の、主人の入院している聖マリアンナ医科大学付属病院までは、車でひと走りの距離、十五分とはかからない。一日二回の病院通いがこのころの日課だった。

ハンドルを握っていると、街路樹の桜が目にはいってきた。すでにはっきり分かるほどに蕾がふくらんでいた。

――四月なのだ、……子供たちに新学期の準備をさせなくては……。

その時、フッと不安が胸をよぎった。

――そうだもう三月も終り。主人が検査のために入院したのが、三月二十四日、すでに一週間がたつ。もう結果が分かってもいいころなのに、どうしてこんなに時間がかかるのだろう……。主人の声のカスレの原因が、単なる声帯疲労やポリープができたということであれば、もっと簡単に結果が分かるはずではないか……ひょっとして……。

しかし、そんな不安も、病院の六階の４０６号室に足をふみいれたとたんにすっかり消し飛んでしまった。

「やーっ！」

八人部屋のいちばん奥、窓際のベッドの上に身を起こしていた主人が、いつもの笑顔で軽く手を上げた。少しもやせていない。顔色も上々。毎日の食欲も旺盛そのもの。それに検査入院の原因になった声のカスレだって、普通に話しているかぎりでは、ほとんど目立たなかった。

主人は、ベッドの上で、売店から買ってきた新聞をひろげ、関心のある記事を切り抜いているところだった。それは、ワープロでの原稿書きとともに、検査のない時の、主人の病院での日課のひとつである。

「お義母さん、具合どう？　もしかしたら、今日あたり外泊許可が下りて帰れるか

もしれないよ」

と主人はハサミを使いながら言った。母の持病の心臓のことを気づかってくれたのだった。

「いいみたいよ、母もきっと喜ぶわ」

病院の昼食時は、配膳車が行き来したりして、病棟内は妙な賑わいをみせる。私は、食事が配られる間に持ってきた花を活けようと思って、主人の床頭台の花瓶を取って廊下に出た。洗面所の方に歩きかけたところで、看護婦さんに呼び止められた。

「山川さん、ご主人のこれまでの検査の結果と今後の治療方針について、先生からお話がありますから」

胸がドキリとした。わざわざ私ひとりになる時を待っていたように声をかけられたことで、さきほどの不安が再び頭をもたげてくるのが分かった。

でも……と思いなおした。検査入院が決まった時、主人は「僕は、結果を医者に根ほり葉ほり聞くつもりはないから、すべてきみと医者にまかせるよ」といった。そのことはすでに先生にも伝えてあり、「それでは、検査結果は奥さんにお知らせしましょう」という約束になっていた。だから、その時が来たというだけのことではないか、と胸に兆したものを打ち消して、案内された外来の診療室に入っていっ

たのだった。

＊

部屋に入ったとたんに驚いてしまった。主治医のM先生だけがイスにかけていて、ほかに十人ほどの先生方がM先生の背後にずらりと立っていたのだ。また不安がどーっと押し寄せてきた。軽く会釈をして、私は勧められるままにイスに腰をおろした。

「どうも、お呼びたてしまして……」

テーブルをはさんで真向かいのM先生が口を切った。

「実は、……ご主人の検査の結果がでましてね、食道の表層に広範囲にわたって悪性の細胞が見つかりました」

なんといわれたのか、すぐには理解ができなかった。「悪性の細胞」、それはつい今しがたまで頭をかすめても、恐くて言葉にしないように注意していたものではなかったか。「悪性って……」私は、とっさに聞いていた。

「悪性って……、それはガンのことですか」

「そうです」

瞬間、目の前が真っ暗になり、イスごと地の底にしずみこんでいくような気分に襲われた。「どうしよう」という言葉と「なんで主人が」という疑問と「冷静にな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com